

二回も頼ぺたにキス

徳 永 正 利

昭和四十八年暮れ、第二次田中内閣で私は運輸大臣に任命された。大平さんは外務大臣だった。明けて四十九年の正月、大平外務大臣は日中貿易協定の調印が何かで北京に行くことになった。それまで日中間の航空協定はにっちもさっちもいかぬ何とも動かし難い懸案だった。自民党内の青嵐会を中心とした一連の人々は、台湾切り捨てにもつながる航空協定に手をつけるのではないかといきりたった。私は出発前の大平さんに航空協定も話し合つつもりですかと尋ねた。大平さんは永い間の懸案だから何らふれることなく避けては通れまいが、むつかしい国内事情をよく説明しておきますとのことだった。私は党内の協定慎重派にも差し迫った問題でもないようだし心配する必要はなからうと鎮静にこれつとめた。ところが、ヒョウタンから駒が出て、五項目からなる航空協定の大筋をのんで帰ってこられた。さあ大変だ。批准内容についての党内調整は連日連夜にわたり難航を極めた。毎週二回の閣議の度に三、四十分早く登院して人目を避けて大平外務大臣との打合せに精を出した。

その頃から大平さんの人となりを肌につれて知るようになった。実に誠実で心やさしく心温まるもの腰で人を包容するかと思う反面、相手かまわず己の信ずるところに向つて、信仰とさえ思わせる不動の信念をもって事を運んだりした態度が、時として人を小馬鹿にした傲慢にさえ思わせる一面があった。この面のみを強く印象にもつた党内集団が存在したことも事実である。この協定も大平さんの努力によつて無事批准を得ることができた。

やがて年経て大平さんは自民党幹事長に就任、私もその頃自民党参議院議員会長になった。党四役というわけ

で、なお一層深いかかわりをもつようになった。当時大平さんは私を「参議院総裁」と呼んではよくからかった。五十二年暮れ、参議院でふんづまった重要法案は、申しわけなかったが全部、審議未了にして閉会することになった。大平幹事長は顔色一つかえなかつた。すかさず幹事長、書記長会談によつて話をつけ、数日後に召集された国会で全法案の成立をみた。大平さんの、えもいへぬ誠実さと、したたかなしぶとさの賜であつた。

また、京都府は蛸川氏による二十数年にわたる府政を自民党の手にとり返すため、参議院議員・林田悠紀夫君に知事候補出馬を望む声が地元挙げての強い要請となつた。大平幹事長も手をやいた。閣僚を目前にした林田君も迷つたが、全くの与野党伯仲の参議院としては、林田君の当選はもちろんのこと、かわる一議席確保の確信がもてるまではそう簡単に同意するわけにはいかなかつた。結局は林田君がみごと当選することになり、またかわりも自民党が獲得した。実は林田君を送り出すことが決定した時、大平さんは私の頭を両手でかかえて、何もいわずに頬べたにキスをした。面白いことをする人だと思つた。

昭和五十三年十一月自民党総裁予備選を迎えた。大平さんは福田総裁の支持をも得て当然勝ち抜けると思つていたふしがある。事情は知らないが、私にはそう思えた。ところが、支持を得るところか、その福田さんと事実上、一騎討ちを演ずることになった。そして何日か過ぎたある日ある時、大平さんは一人一人握手をして支援をたのんで、室を出る前に私には何もいわずに頭をつかまえて頬べたにキスをしてさつさと出て行つた。この話を大平さんが亡くなられて百日祭の日に奥様に話したら「アラ、私よりも多いくらいだわ」といつて笑われた。

昭和五十五年六月の衆参同時選挙後の特別国会で私は参議院議長に選ばれた。休会中パナマ国を訪問した。パナマ市にはすでにパウロ二十四世通り、ウインストン・チャーチル通りの二つがある。三番目に大平通りが今年春、命名式が行われるので、パナマに大平さんの名は永久にのこるだろう。

(参議院議長)